

私は文を読むことが好きだ。私の「文」との出会いには、零歳の時。母が、寝る前に絵本を読み聞かせてくれたことだった。母によれば、当時の私は目をキラキラと輝かせてなかなか寝付かなかったそうだ。この時「文」は私に、読むことの楽しさを教えてくれた。

それから保育園、小学校へと上がった私は本だけでなく、雑誌などの小さな活字まで読むことが好きな子になった。同時に、あまり友達とコミュニケーションをうまく取ることができなかつたため、休み時間も下校途中もずっと本を読んでいた。

ある時、授業で教科書の小説についての感想文を書くことになった。その小説は友達について考えさせるもので、「自分の体験談を交えて」書く感想文だった。その時私はうまく書けなかつた。なぜなら、「文」の世界にばかりのめりこんで、自分の世界を見ようとしなかつたからだ。この時、「文」は私に自分の世界を開くチャンスを与えてくれた。

中学生になった私は、文章を書くという壁を乗り越えられずにいた。自分の思いをうまく言葉に表すことができず、また、友達の中にはとても文を書くのが上手な子もいて、「自分には才能がないのだな」と諦めていた。

そんな中、夏休みの宿題で「私の原動力」について書く作文に取り組んだ。私はいつも支えてくれていた母への感謝を「文」に書いた。今思えば、当時はそれまでの人生で一番夢中で自分の思いを書き連ねていた時間であり、初めて自分の思いを素直に書けた時間でもあった。その作文は学校の代表作品として出品されることになった。私自身は、代表になったことよりも、自分の「文」を読んで先生と母が感動してくれたことが何よりもうれしかった。つたない言葉でも、伝えたい気持ちが届いたことへの喜びだった。

この経験で、「文」を書くことは、必ずしも才能や大きな出来事によって成されるものではなく、自分の思いを読み手に伝えようとする工夫が大事なのだ、と私は感じられた。

人間は、思いを誰かに伝える方法をたくさん持っている。その中でも「文」は最も伝えやすいのではないか。現代を生きる私たちにとって、「文」で伝える、メールやSNSを用いた会話は、今となっては自己主張やコミュニケーションをとるための必須手段になりつつある。

古来の手紙から始まり、現代のSNS。会話だけでは伝わらない隙間を「文」は埋めることができる。私たちはそれを読み解くことで、新しい発見や、自分自身の心を成長させるきっかけにもなる。

今私は、「文」に触れ、「文」と共に私自身を築くことが大好きだ。